

特116

710



始





特 116

710

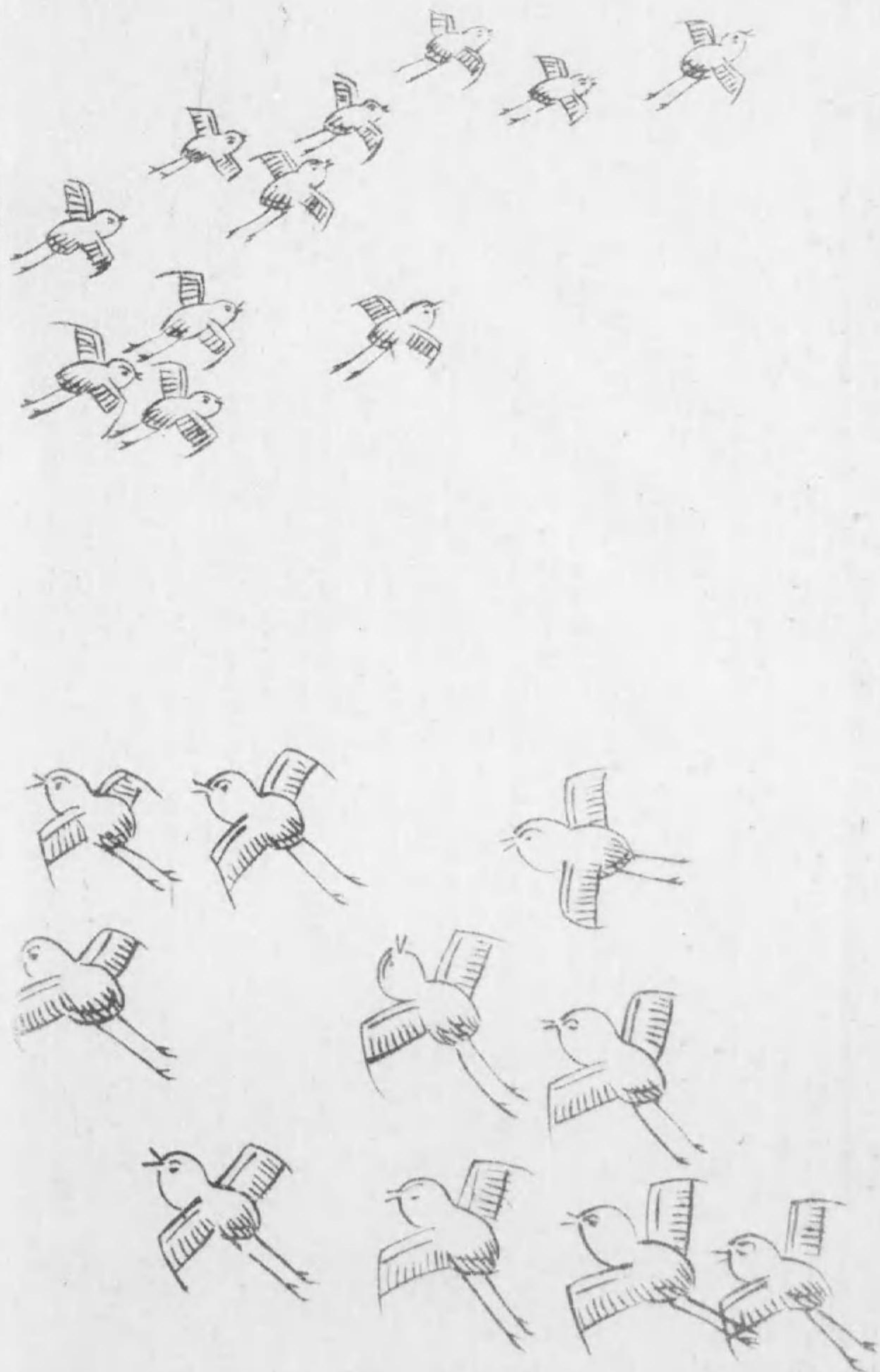
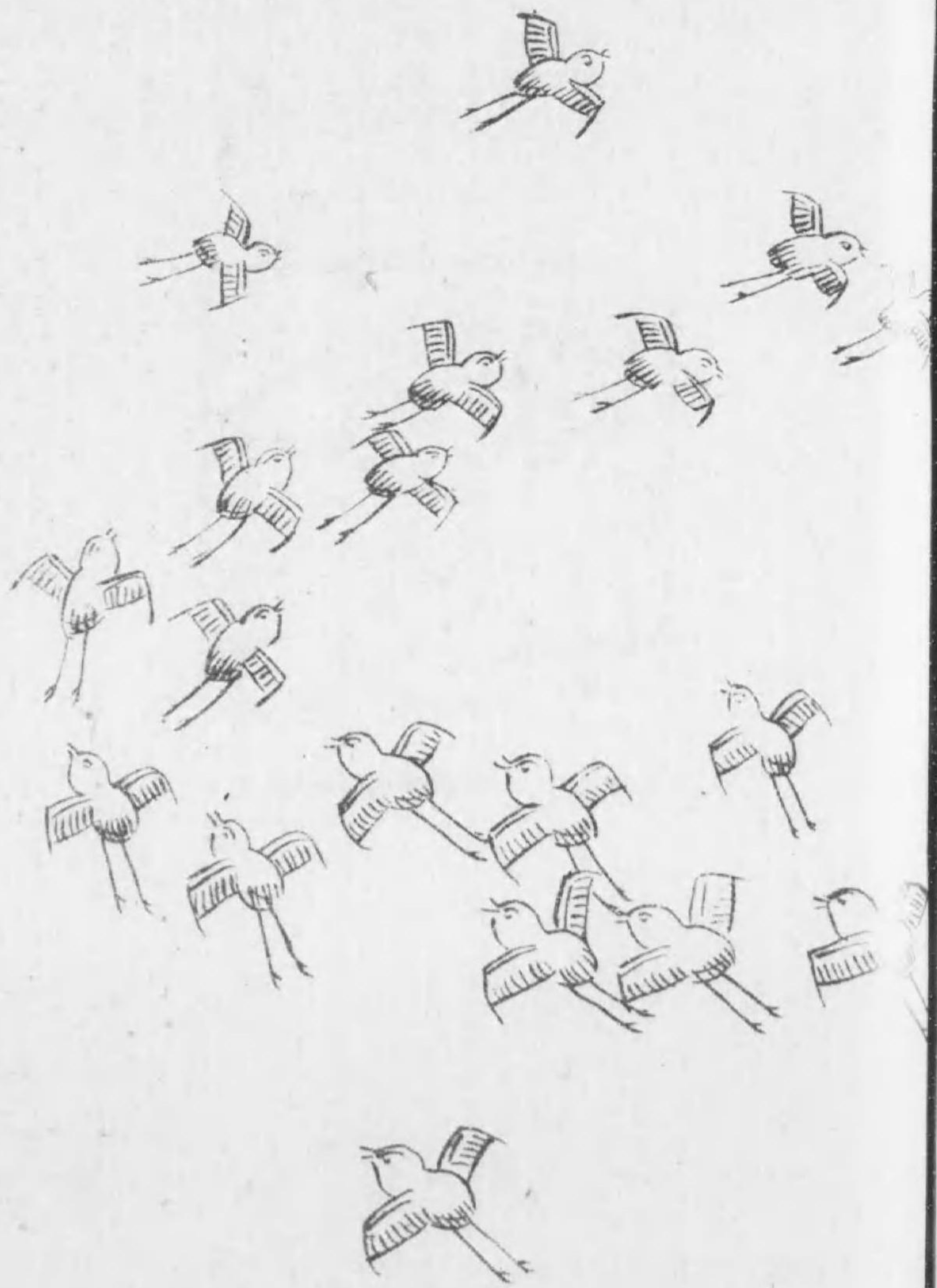


觀世流改訂謄本

外十









物116  
210



觀清之  
世之長





文學博士

明治四十年

井上

頼國

本木文監修

丸

世清

桂本訂正

大正五年

丸

岡桂

解解并補訂

山崎

樂堂

柏子附訂正

大正十年

山崎

樂堂

柏子附再訂正

# 合浦

## 解題

合浦に在る時、時の太守の食慾を悉く其産地を更へしが、孟嘗といふ人、太身なりて其  
 改を布きたる馬、後合浦に還りて産するに到れりといふ支那の邊の代の傳説と、数人とい  
 へる海中の生物を捕りて食す、此は流珠と名するといふ南海の古傳説とをとり合せ、これを十訓抄に見え  
 たる、漢武帝一日昆明池にて死なんとせむを疑ひ給ひしに、其夜夢に現れて喜び、翌日再び幸し給  
 へる時、明月珠を奉りたりといふ報恩の傳説によりて脚色したる曲なり。曲名に合浦の字を冠して  
 あり。古き別名をかつほの玉といふ。看聞日記に永享四年二月仙洞御所にてかつほの玉の上澄せられ  
 記係あり。又春日大宮実徳院祭禮園の田樂の曲名中にも此名あり。古く田樂にて凡座となりて見ゆ  
 院に行はる、ものは文藝短く、ことに命を致はれたることにつきての詞少く、原作の文を有るも、其  
 歴然たれども、古き原文の傳はるもの無く、これを對比すべき由無し。此曲の録樂の作と思はる、古き  
 廢曲に白魚(一名、喜慶)あり。

## 誦ひ方便概

輕き曲なれば然してさらりシテ、前は童子姿なれば重からず、十つきり  
 と読みなく扱ふが宜し。此心持にて一聲を流ひ、詞に移りて  
 いかにかは屋の内に云はるは、意なるべく、よし難なりとも、云は指針に、舞合は抜けぬやうに取つてさらり  
 と扱ふ。今は何をか云々の詞は、すわりと出で、命をつかれより、所か針に、絶えぬ實となるべきなりと指  
 導りと流ひて地に流す。後は一更して、剛性た、風爽たるべし。出の訛は、云々は、  
 手捲く確りと流ひ、これこそ長如の玉の流のは、来り調子よくすわりと扱ふ。ワキ、通してさらり  
 初の上最は氣を承けてさらりと附け、一河の流をのハリを断か確りと、下げより前の位に度す。歌人後  
 に云は、確りと出で、合浦にもより精強めたさらりと取、止めの返りにて、鏡を、後、左、右、左、右の  
 云々は、来つてとつりりと附け、報せさらんとより、運びを附くる心。幸ひはさらりと取つて、これまで  
 かりや、を指導りと扱ひ、其後、漸次氣を來せて、爽やかに流ひ納む。

## 合浦

漢書に合浦郡、武帝置、雄陽南九十一里、一見、仲、廣東州の西端、廉州の傍に  
 處人、遺合浦太守、即不産、粒實、而海出、珠實、與交趾、比隣、常通商販、貿羅、糧食、先時、守、孟多  
 會職、荒入、採求、不知、死、耗、殊、街、佳、於、交、趾、即、界、行、旅、不、至、人、物、無、資、食、者、餓、死、於、道、嘗、到、官、半  
 易、前、弊、求、氏、病、利、未、滿、歲、去、珠、復、還、百、姓、皆、反、業、商、貨、流、通、稱、為、神、明、聖、靈、集、於、漢、江、  
 出、時、蚌、中、有、明珠、到、中、後、月、出、蚌、於、水、面、浮、開、口、含、月、光、感、而、產、珠、合、浦、珠、是、也、等、傳、流、多、  
 わたつ







五番目  
畧脇能

合浦

無季

ワシテ

鯨人、耕人(前、童子)

早泊  
これ、唐土合浦と申す處は、  
る者も、今日の日も、  
浦は出て釣き、

シテセイ上ニ  
ツク  
わたり、  
都を出づるあり、  
まゝまゝ、一夜の宿を、  
日も

合浦











真如の玉の緒の壽命長遠息災  
 延命の寶の珠の當來までの世  
 の願も成就あるべしとれまでありや  
 織りつる綾の浦の合浦珠の二度帰る  
 はの千秋萬歳の寶の珠の千秋萬  
 歳の寶の珠の合浦の浦までありける  
 ありける。

合浦のミ

生田敦盛

解題

古く別名を生田といふ平敦盛の遺子賀茂明神の靈夢に於て生田の森にて父の亡霊  
 に逢ふことを作れり二百番謡用録に「生田敦盛傳風作」と記し能本作者註文には生田  
 を揮風之作として擧げ且つ服能と記せりされども此曲服能に非ずとて生田といへるは別名別曲に  
 や將服能と記せりか謀に敦盛の遺子のことには史に所見無し平次源この後世に種々の風潮傳はり  
 一に敦盛の子思に附きての巻説を以て生田たるべきか或は亦謡曲作者の創案に成るにや地に  
 同じく敦盛遺子のことを作れる唐曲高野敦盛あれどこれは此曲より生れたるものか否か如し

謡の方梗概

住はぐ僕成忠度に似たれどもれよりも輕き曲なり  
 唯全曲に思愛の情味掬すべしものあるを宣うとす  
 シテ 好く扱ふ出のサシ  
 は庵の内にて獨言つ終れば其趣を得て高からぬやう精辭に扱ふごとく餘りに抑へて老人の如くなる  
 を好まず思の人の心をいさすは心持を更へ任斬かすもて靡りとあるべし無愁やなまのサシは  
 依くなるぬやう火くくいのめかた出でさそも身より氣を斬か受へてはつきりと謡の行き終りの  
 一句を心持して止むクセの上端は稍大きかた謡ふ嬉しやなほは心持を改めてすらくと舞後の  
 あれに見えたるはさそこの調は力を籠めて靡りと勢よく言ひこれより修羅衆の心かすべし  
 物々しあけくれには出を前へかけて文吏に恥かや子ながらんは心持して調子を内へ取る子方  
 聲を高のに取りますらくとあらばサシは殊勝の心なるべくワキワキ 尋常なるべし道行  
 との向答は普通この敦盛とはさそは氣の抜けぬやうかいつて出づワキワキ は少しく靜に謡ふ  
 地 初の下歌は子方の心持を承けておつとらと出づべく上歌は消さらくとあらばサシは  
 際々すにさらりと附け愛身にあまらばかりなりより火くくゆるむふけゆく月のさそは  
 下歌の如き調子にて精辭にクセは餘りさらくとは扱はずさりとて沈むべからず名残盡るゝめ心  
 かなしはシテを承けて運び好く謡ひいふかと思はれはさそは修羅衆りて地みなく馴れつら以下又氣勢  
 を保ちてさらりと謡ひ後け修羅の敵の冷變りより普通通の位になり月澄み渡りて以下は火くく言を傳  
 のて物辭に扱ふべく靡りと出で立ち去らばさそは氣をかけて運び其まうにて謡ひ納む

辭解 黒谷法然上人

浄土宗の開祖美作の人名は源空法然は其房流なり十三歳の時此歌  
 十餘年高倉天皇安元元年四十三歳の時念佛柱を宗是とする浄土宗を開けり建曆二  
 年正月八十歳にて歿す黒谷は比叡山の西麓にありて其退隱修道の地なるより世に黒谷上人といふ賀茂

生田敦盛







に攻め潰されしを飾りていふ。本雪の程は信濃の名所にて。花の都を立ち出で云。奇永二年平  
歌にも多くよまれたればかけてと云はん序に置きたり。宗盛義仲の  
威に恐れ安徳天皇を奉じ神器を擁し。天さかる。都の北河海上の生活のわびありしを。都  
て京都を逃れ西海に奔りしをいふ。又立ち歸る云。平氏室山水島の二戦に勝らて  
の儘まひ。平氏の一族都を逃れて筑前の太宰府に。勢を得後福原に運りて城を  
築き、東生田の森、西一の谷の岡を固めしをいふ。立ちかへるといへ。乾頼、義経。一の谷の戦には乾頼東  
の傍にて浦波に後け波の澄むといふたかけて頭磨といひつゝ。軍勢の多敷。運も観弓の云々。平家の弓矢  
西門一の谷に向ふ。大将として城後の。雲や霞の云々。なる形容。運も観弓の云々。平家の弓矢  
向通鶴越より敵の不意を襲ひたり。の盡きたらば観弓に掛け弓の隊により矢竹と承けて彌生心にいひ掛け、更矢竹の傍にて心しよわくと  
承く。観弓は観の木にて作れる弓なれど。こには修辭の連鎖といたるまでにて観の字に意味なきし。  
彌生心は丈夫の。あはれも深き云々。表れの深きを生田川。身を捨てし物語。大和物語に同  
寄み進む心なり。の深きた掛く。身を捨てし物語。大和物語に同  
投じてん津の國の生田の川は名のみなりけりといふ故をよみて女。よのなかりける。せんかた。親  
の生田川に投身せし物語あり。之を教盛の戦死の事と傳りていふ。よのなかりける。せんかた。親  
子鸚鵡の云々。親子の遺ふを鸚鵡に掛く。鸚鵡の袖は鸚鵡の形を徹りたる袖なれども。こには前  
鸚の袖なれど。片時。大い。修羅の敵。修羅は何修羅の敵。佛現にていふ。通の一なる。修羅通  
かどあり。片時の。修羅の敵。修羅は何修羅の敵。佛現にていふ。通の一なる。修羅通  
殺伐なる戦争の有様を修羅の戦に喩へ。戦死者は谷此通に墮し。死後と猶何修羅を。蜻蛉の云々  
敵として闘争の苦患より離るること無しとする。崖曲作者の慣用筆法なり。蜻蛉の云々  
立ち去る姿の消えゆく意なるをわづらふを。新按達集の歌。蜻蛉の小野の浅茅生風を涼しきこと  
に静を借りて際り。浅茅より露霜と後け。浅茅が原に置く露霜の如く消え去る様は作れ  
り。かげらふの小野は大和の名所なり。こには縁なられども文章の俊として用ふ。

一番目

生田教盛

七月

子方 教盛遺子  
シテ 平教盛  
ワキ 法然上人ノ從者

早付  
こころ黒谷法然上人よは入申も者よ  
こころよこころよわたるる人の或る時上人  
賀茂へ遠来詣下向の時下り松の  
下よ二歳たあつあつ男子の美一まを。  
手箱の蓋よひれ尋常よ捲入捨て  
置かしてさぞよ入不復し思一めたれ



抱き寄せし清くさうと。まじく〜音と給  
ひの程よ。せむし十歳し清く餘つる。父母の  
あまの事とて歎か給ひの程よ。説法の後  
この事とて清くも語つる。聴衆の中  
より若き女生のまじくも。我が子とて  
由行せらるる。密に清く奉ねる。一年一の  
谷とて討たれ給ひ。夏盛のまじくも。

あま〜も〜の。此事を同給ひて。算  
とて。あまのまじくも。姿を見せ給ひつる  
と。賀茂の明神へ祈誓ある。まじくも  
行せらるる。十七日詣で給ひ。今日  
は。満散とての程よ。同道申し。賀茂  
の明神へ素詣申す。これには。賀茂の  
明神とて。成行誓ある。



子方サシ上

ヨラク

ありがたや處あらあるは社のあけの  
 玉垣神さびていも澄めるは手洗の  
 染も恵を頼むあり地下敷中 草もあり  
 ともたらちねの其面影を見せ給へ打切  
 ざくさあり祈心の末遂げざ祈打切  
 の末遂げざ恵もあまあまへかや打切  
 誓いの神もい願を備へあま打切

小謡

ませ願を備へあま子方句 ませ あら不

思議や。少一睡眠のうらちよあたらなよ

雲葉のよ業つてゐ早あめたたやあ

雲葉のよを信物語つる入子方のあ

法寶殿のうらちらうらちもあたらたあは

聲もて。海草のよあつあついもいもいこ

思ひい。うらちらうらちの國は田の森へ















へと新誓由き。明神憐みおあり。ま。  
 圖まよ行せつ。あさむ。圖王行を承り。  
 暫一の暇を賜さる。あり。親子の契も  
 今を限あるべし。更け行く月の夜  
 ももがら昔やいざや語らん。然るま  
 平家の禁華を極め。その始花鳥  
 風月の戯れ詩歌管絃の様。よ春

●仕舞

秋を送る。ゆい。あさむ。あり。ま。  
 けん。本曾のかけは。懸けてたよ。思  
 せぬ。敵の落さる。て。ま。上。を。始。め。奉。り。  
 一門の人も悉く。花の都を立ち出で。  
 西海の宮まよ。習をぬ。旅の道も  
 くら。山を越え。海を渡り。暫一の天さ  
 あり。鄙の。まよ。の。身。あり。ま。よ。ま。







怒らせ給ふごと地上に  
 不思議やあるよかと見えぬ不思議  
 やある黒雲俄に降りて猛火を放ち  
 刃を降して其數知らざる修羅の敵  
 天地を響かす満ち満ちたりキ物  
 一あつてはよ地馬れつる修羅の  
 敵ぞととた刀真向ふヤ

さやあつてはよ馬れつる修羅の敵ぞととた刀真向ふ  
 戦ひつる暫らくあつては黒雲も次第  
 小ちらちつ修羅の敵も息を消え  
 尖せし月澄み渡りて明となつ時  
 空をあらたけりキ身かや子  
 あらも地かく苦みをみる事よ  
 意を帰しては跡をねんころよキ











古今

古今和歌集をさす。記實之等醍醐天皇の勅命により萬葉集に漏

の誤に古今 勅撰 一人の作歌を編

字序に平城天子詔侍臣令撰萬葉集と見えたりは古今集の真

讀人知らず 讀人不知を著る例なり。平城の天子 古今集の真字序の文字に從りて

年とありて明に平城天皇を指すなりと見えたりは古今集序の

著者記實之の誤にて實は奈良朝に撰せられたるものなり。橘諸兄

の私撰にて而かも理せざる事編のまゝ傳はれりものと見えたりは

物撰に昔高野の女帝の御代天皇御寶五年には左大臣橘諸兄御

せ給ふとあら外、諸書に橘諸兄の撰と見えたりは古今集序の

撰と見えたりは古今集序の撰と見えたりは古今集序の撰と見えたりは

小野の山所は右の衣通姫の流なり、あはれなるやうに強からずとありて

丸大夫の流れ、古今集真字序に大伴黑主之助、猿丸大夫之流也、猿丸大夫の流は其

東無、花の蔭ゆく、古今集真字序に大伴黑主は其まゝ殿といはれ

將、徳大寺左大臣は詞をたぐさずして無名の酒を名なきの酒と敷にふみ、五條の三位入道(後成)は富士

こと鴨長明の無名状に出づ、此故事を引かんとて、四病、和歌の撰式の上には生じあき四種の病聲、一

花病といふも、喜撰式に出で悦目状、興儀状等に解からず、これら四種の病を、八病、同じく八種の病聲、

なる形に重りて身障とせらる病聲なり、後に同じ文字と、これら四病なり、八病、同じく八種の病聲、

に同心病二に亂思病三に癩病四に諸病五に花、三代八部、集に後拾遺、金葉詞花、千載、新古今を合

柄病六に老病七に中絶病八に後悔病、三代八部、集に後拾遺、金葉詞花、千載、新古今を合

して八代集といふこと、いふ三代八部はこれを指す、但、これら四病の歌集、しんもかほどの、四病八病

が此曲に名を列せらるる人も、遠に後世の撰にあらざるも、治無し、しんもかほどの、四病八病

る、位同字の難は三代集八代集、車轉の橋、小町が胸の鼓動するを奈良の所ならず、難の橋に

の古今にいづらあり、まへつぎみの音、天皇に侍り奉る下、馬々の女房、病は女官の居る場、清き流、

うちぎみ、まへつぎみの音、天皇に侍り奉る下、馬々の女房、病は女官の居る場、清き流、

性本には、みかほの水、青丹衣の風情、れども、解會に過ぎて有難、此意は、若し然らざらば、

のの敷字を冠す、青丹衣の風情、れども、解會に過ぎて有難、此意は、若し然らざらば、

別の青丹衣の風情なるべしとて、青丹衣は身以負けたる、實例の引用と見ると、要當なるべし、中絶病者

流の向に互に前後を寫りて、難し合ひたり、例も多ければ、これら青丹衣といふ詞につき、言ひ多し、終に、

けたる先例を引き、人用さかなや、外聞わら、古歌性本には、論言、居玉、玉たすき、

古今

古今和歌集をさす。記實之等醍醐天皇の勅命により萬葉集に漏

の誤に古今 勅撰 一人の作歌を編

字序に平城天子詔侍臣令撰萬葉集と見えたりは古今集の真

讀人知らず 讀人不知を著る例なり。平城の天子 古今集の真字序の文字に從りて

年とありて明に平城天皇を指すなりと見えたりは古今集序の

著者記實之の誤にて實は奈良朝に撰せられたるものなり。橘諸兄

の私撰にて而かも理せざる事編のまゝ傳はれりものと見えたりは

物撰に昔高野の女帝の御代天皇御寶五年には左大臣橘諸兄御

せ給ふとあら外、諸書に橘諸兄の撰と見えたりは古今集序の

撰と見えたりは古今集序の撰と見えたりは古今集序の撰と見えたりは

小野の山所は右の衣通姫の流なり、あはれなるやうに強からずとありて

丸大夫の流れ、古今集真字序に大伴黑主之助、猿丸大夫之流也、猿丸大夫の流は其

東無、花の蔭ゆく、古今集真字序に大伴黑主は其まゝ殿といはれ

將、徳大寺左大臣は詞をたぐさずして無名の酒を名なきの酒と敷にふみ、五條の三位入道(後成)は富士

こと鴨長明の無名状に出づ、此故事を引かんとて、四病、和歌の撰式の上には生じあき四種の病聲、一

花病といふも、喜撰式に出で悦目状、興儀状等に解からず、これら四種の病を、八病、同じく八種の病聲、

なる形に重りて身障とせらる病聲なり、後に同じ文字と、これら四病なり、八病、同じく八種の病聲、

に同心病二に亂思病三に癩病四に諸病五に花、三代八部、集に後拾遺、金葉詞花、千載、新古今を合

柄病六に老病七に中絶病八に後悔病、三代八部、集に後拾遺、金葉詞花、千載、新古今を合

して八代集といふこと、いふ三代八部はこれを指す、但、これら四病の歌集、しんもかほどの、四病八病

が此曲に名を列せらるる人も、遠に後世の撰にあらざるも、治無し、しんもかほどの、四病八病

る、位同字の難は三代集八代集、車轉の橋、小町が胸の鼓動するを奈良の所ならず、難の橋に

の古今にいづらあり、まへつぎみの音、天皇に侍り奉る下、馬々の女房、病は女官の居る場、清き流、

うちぎみ、まへつぎみの音、天皇に侍り奉る下、馬々の女房、病は女官の居る場、清き流、

性本には、みかほの水、青丹衣の風情、れども、解會に過ぎて有難、此意は、若し然らざらば、

のの敷字を冠す、青丹衣の風情、れども、解會に過ぎて有難、此意は、若し然らざらば、

別の青丹衣の風情なるべしとて、青丹衣は身以負けたる、實例の引用と見ると、要當なるべし、中絶病者

流の向に互に前後を寫りて、難し合ひたり、例も多ければ、これら青丹衣といふ詞につき、言ひ多し、終に、







私宅へ忍び入り。教を問わされ存レら  
小所サシ上  
アライイ出  
ヨラク  
それ教の源を尋ぬるよ。聖徳太子ハ  
救世の大仙。片岡山の叢をりせしよ  
弘め給よ。明日内裏より歌  
命をへりかみし。甲さむらひも  
ををばしはなむらして。水邊の草より  
題を賜はしたる。面白水邊の草

いよ題よ浮みてさく。時々あふよ  
何を種として。浮草のほのうねく生  
ひ花のらん。此歌をやとて短冊より  
一たむらひこ申テ。今よ誰今の歌を  
問ひしあふ。何れか承つて  
何れ問ひしあふ。時かあふよ何  
を種として。浮草のほのうねく生

草紙先小行



いづれかみいりて Def. 101 けしきかみいりて  
あかき道の道たふらき道の道よにあ  
らまじき道の道たふらき道の道よにあ  
草あまらうりて。帝ノま教と許入申し。

貫之次第上  
あまの馬り歌合は勝たせやと存の ワキ  
めでたまは代の歌合 ツヨク めでたまは代の

は會われども

歌合詠して君を仰めん 時一も  
頃ハ卯月半。清涼殿の是會あれども  
花やらよこそ見えたりけれ 貫之  
人丸赤人のは詠を掛け 貫之 各詠み  
たる短冊をわれもくと取り出し。  
は詠の前よぞ置かたりける 貫之  
馬前の人よ 貫之 小町を始め何内

貫之次第上

三



の躬恒紀の貴之 貴之 右衛門の府生  
 壬生の忠岑 貴之 ひだりみぎうよ著座  
 して 貴之 既よ詠をぞ始めける 上 ほの  
 ぼのと明石の浦の朝雲務よ島隠れ  
 ゆく舟やぞ思よ 地上歌 げよ島隠れ  
 の月 打切 のげよ島隠れ 入る月の淡路  
 の繪島國あれや 打切 始めて歌の遊こそ

●小 詠  
思ふま

遊こそ

心細く道とあれ 打切 その歌人の名所も  
 皆庭上よ並み居つ。君の宣旨を待  
 ち居たり君の宣旨を待ち居たり  
 いよ貴之 貴之 序前 貴之 始より  
 小町があひつてよ 貴之 思ふをたぬめたり  
 まづく小町が歌を讀み上げし入  
 畏つて 貴之 水邊の草 かん井 時あふよ行を

貴之

三



種とて浮草の波のうねく生ひ茂  
こらんま白 面白と詠みたる歌やこの

歌よ勝つらよもあらう。皆く詠入  
畏母之つてゐる 暫らへどいつか歌よ  
てゐる 何とて歌や申さずかたし

身少母かた上がヨコクの教チク諭ラシやオ先代サキノの昔コトも知

らむ。既スガに衣ツ通ト姫ヒメ此道ココノミチのまたらし事  
を歎ナガき。和歌ワカの浦ウラあよ跡アトを垂タれ絵エひ。  
玉津島タマツシマの明神ミカミようこの方カタ皆みな此道ココノミチを  
たしをもあつ。それよ今の歌ウタをま歌カと  
仰オホせらる。古今コノイハ萬葉マンヤクの教チク撰センよてゆか。  
又また家の集イヘノツグよてあるやらん。作者サカヒハ  
誰たれもてあまままままと委オウしく行イせらる。



<sup>万葉集</sup>行の如く其證歌分明なりていふべき  
 奏一由まじむ草おの萬葉題の夏  
 水邊の草まの思えたりとも讀入知  
 らまじむおわたるべき作者の誰とも存せ  
 ぬありナリそつ萬葉の平城のまの  
 彦守撰者の橘の諸兄歌の數の七千  
<sup>歌</sup>首及んで皆あらむ知らぬ歌のまじむ

らまじむ。萬葉のいふ草おの數多の本  
 のまじむしおまじむいふくナリまじむ  
 としてこれのまじむまじむいふまじむ  
 身の衣通姫の流あむつ。憐む歌を  
 強からむまじむ。古歌をいふまじむ首はあり  
<sup>ナリ</sup>たしておのまじむの猿丸を夫のあむれ。  
 それの猿猴の名を以つて。我が名を















なまの由申ま づゝへま 申ま 申ま

かぐかぐとさうらへ申ま 申ま 申ま

いづいづとまの申ま 敷ま 敷ま 敷ま

草子を洗ひま 繪ま 言ま あれがま 嬉ま

くて。落ま つるま 後ま のま 玉ま 襟ま 結ま んでま 肩ま

うちま かけてま 既ま 草ま 子ま をま 洗ま ことま

秋ま 歌ま のま 浦ま わま のま 藻ま はま 草ま 和ま 歌ま のま 浦ま わま のま

● 獨吟

藻ま はま 草ま はま よま せま かけま てま 洗ま さんま 天ま のま

川ま 瀬ま はま 洗ま ひま 秋ま のま 七ま 日ま のま 衣ま ありま

花ま 色ま 衣ま のま 袂ま もま 梅ま のま よま ほま ひま やま

まま 雁ま がま ねま のま 翼ま はま 文ま 字ま のま

敷ま あま れま とま 跡ま 定ま めま ねま せま あま らま せま もま 頼ま 川ま

小ま 耳ま をま 洗ま ひま 濁ま れま るま 世ま をま まま

しま けま りま 奮ま 苦ま のま 鬚ま をま 洗ま ひま

草紙の川

十



地拍子  
洗へば  
トミ

又  
私ニ  
私ニ  
トミ

草紙

川原よ解くる薄氷 地 春の歌を  
 洗ひて霞の袖を解かりよ 地 冬の  
 歌を洗へば冬の歌を洗へば 地 袂も  
 寒き水鳥の上毛の霜よ洗せん上毛  
 の霜よ洗せん。遠の歌の文字をわら  
 忍ぶまの墨消え 地 涙ハ袖よ降り  
 くらして。忍草も乱る。忘草も乱る。

地上

小町

釋教の歌の敷ハ 小町 蓮の虫ぞ乱  
 神祇の歌ハ柳葉の 地 庭火  
 よ袖ぞ乾ける 地 晴雨よぬれて洗ひ  
 紅葉の錦ありけり 地 任吉の  
 任吉の久しき松を洗ひてハ岸よ寄  
 きる白波をさつとわけて洗せん。洗ひ  
 洗ひて取りあげて。見えぬ不思議也

草紙

十一







塵敷に真つらく ちり して又時の面目  
 あしては草紙をらんで着へてか田舎の  
 前の累カヨクの 地サシ上 花の打衣風  
 舞せよと カヨク 春来つては編く  
 折鳥習カヨク子さや申し カヨク 拍子さうち  
 塵敷を静め カヨク 春来つては編く

●仕舞

此れ桃花の水 地 石の障りて塵チリく  
 来れり 地 手まつて入る花の一枝  
 も色の衣や重ぬらし 中 霞立つ 中ノ舞  
カヨク 霞立つては カヨク 遠山よある朝ぼらけ  
カヨク 日影よ見ゆる松の千代まで松の千代  
カヨク まで四海のはも四方の國も民の  
カヨク 戸がもぬは代こそ カヨク 舞の嘉















杉スギの島シマはあしあしも行くいくも葉ハを湖ウミの  
舟フネを渡ワタう山ヤマを越コえ幾イ夜ヨを夜ヨの  
草クサ枕マクラ明アキラけ行いく空カラも星ホシ月ツキ夜ヨ鎌カマ倉クラ  
山ヤマを越コえこ島シマから津ツ浦ウラの島シマも著ツかかかて  
けけ下シタ浦ウラの島シマもも下シタ浦ウラの  
行いく島シマの島シマもも越コえこ島シマの島シマも  
島シマの島シマもも越コえこ島シマの島シマも

はや相あ摸かの國クニ六む浦うらの島シマも著ツかかかて  
此こ渡ワタうことて安やす房ぶどうの清きよ澄す入い来きら  
ままの島シマもも越コえこ島シマの島シマも  
寺テラの島シマもも越コえこ島シマの島シマも  
やや申まをの島シマもも越コえこ島シマの島シマも  
思おもひの島シマもも越コえこ島シマの島シマも  
今いまを越コえこ島シマの島シマもも越コえこ島シマの島シマも







ありよ。この本一本に限る紅葉色  
深くだんごのあつりかざ。為相の御  
取あへも。とて此一本よまぐれ  
け。よかたなり庭のもみぢ葉と詠  
し給ひ。今よ紅葉を傳めて  
面白の成詠歌やな。あし敷あらぬ身  
あてども。平一回のためよあかやあつ。ま

はつる此一本の跡を見て。袖の時雨ぞ  
よかたなり。あつあつきたの序  
平一。あつあつ。此本の面白よとて  
い。か。か。為相の御の  
成詠歌。今よ紅葉を傳めたる。  
あつあつ。あつあつ。あつあつ  
不審に成理。あつあつ。詠歌よ預りし時。







姿を見え申さしと 地中 みのりの空も  
冷まり 此古寺の庭の面霧の籠  
の露染 千んたの花をまき分け  
行く人も知らざりま けり行く人も  
知らざりま けり  
 中入  
 早上秋  
 待話  
 處から 心よ 通し稱名の 心よ 通し稱  
名の 法の聲も松風もはや更け

きら 秋の夜の月澄み 渡の庭の  
おも寝 られん もののお面白 や寝 られん  
もの 面白や あら あり がた の声  
 後ニサシ上ニ  
 一声  
 申ひ やあ 妙ある 値遇 の縁 よ 引かれて  
 心 度 い ま あ り た り 葉 み さ し 覺 え ま  
 給 よ あ よ 不 思 議 や あ 月 澄 み  
 渡 の 庭 の 面 よ あ つ つ の 女 入 ら お ほ い

六番

六



●サシクセ獨吟

影の如くよ見え給ふぞや。草本  
 國土悉皆成佛の此妙文を疑ひ給  
 まで猶昔を語り給へ。これ四季  
 をうくの草本己この時をえて  
 花葉をまぐのその姿を心ありと  
 誰りよ。まづ青陽の春の初  
 色香妙ある梅が枝のわら咲きとめ

●仕舞

●小謡  
色どやマテ

て諸人の心や春よありぬらん。又ハ  
 櫻の花盛。唯雪のみに三吉野の  
 千本の花よ。如くあり。月日経て。  
 移れは愛の眺か。櫻の散りて庭の  
 面は。咲きつゝく卯の花の垣根や雪よ  
 まがらん。時移り夏暮れ秋も半よ  
 ありぬらん。空をあらむら時雨昨日ハ



薄きもみぢ葉も。露時雨も。山に。  
下葉残らぬ色さや。あつても。  
東の奥の山里よ。あからたまある。  
都人の哀も。葉の露の情。  
よかれつ。姿をまみえ敷よ。詞を。  
かき値遇の縁。葉は法を授けつ。  
佛果を得。め給へや。更け行く。

仕舞

月の夜遊を。色あき袖をや。  
返さま。秋の夜の千夜を。  
夜よ。重ねても。詞残りて。鳥や鳴り。  
ま。ち。ノ。聲。の。鳥。も。の。ぎ。く。よ。  
ノ。聲。の。鳥。も。の。ぎ。く。よ。鐘も。同ゆる。  
明方の空の。處の六浦の浦風山風。  
散る紅葉の。

六浦











一つの法 遠行 遠く家を離れ 三日月の法 早鏡の形を三日月に喩へ、古里の法 長き年月を度  
 柄とす。新鏡古今集の歌、故郷の新瑞の萩を吹く 其月の縁にて次句を引ぬ。 古里の法 長き年月を度  
 現に見し世の露千袖にこぼるるを引く。 つてこもつ あらぬ妹脊の法 他の女と夫婦の契を後  
 やうも無くなれりとなり。妹脊は夫婦の古法。妹脊の川は出敷に夫婦に守せし 達ふ事 鏡の片あ  
 跡み懐はしたる詞なり。以下、妹脊の川、川波立ち、立ち降るべきといひ次ぐ。 達ふ事 鏡の片あ  
 と、二人の逢ふとを思ひていふ。以下、其あふ 半月の 山の端にまで打ち傾いてといはん為の所な  
 事の難きを形見にかけ、鏡の割れを縁にかく。 半月の 山の端にまで打ち傾いてといはん為の所な  
 傾くと付頭を。 名を磨く 名を磨く 冥官 地獄、故鬼、高生、天上、人 俱生神 一切  
 の出生と俱に生じて人の長悪を死 願志の法 願志を死火に喩へたる用別多きより燈元立つと云いつ  
 一、願魔法王に報告する神。 願志の法 願志を死火に喩へたる用別多きより燈元立つと云いつ  
 つ、宣輝の法 願は云々と使けたり。熱鐵の法は地獄にて獄卒が罪人を打つに用ふるもの。 魂は冥  
 空輝の法は輝のめけがら、願は死灰にて、其心を存せざるを輝のめけがらに見立てたるなり。 魂は冥  
 途に云 魂は神氣、魂は形骸、禮記に魂氣清干天、形骸清干地とありて、俗に魂は  
 にて獄卒が亡者を引つせげ、引きまげ生前の長悪を映し 如何に 女人のこととて悪業の影  
 出すといふ法。淨波瑞鏡。衣の縁にて張りの音を揚る。 如何に 女人のこととて悪業の影  
 孝子の平の功力によりて意外の空に 玉釵 玉のかんざし。 かいみて 座 御空に云 座  
 映りかば、驚きたる体に作れり。 玉釵 玉のかんざし。 かいみて 座 御空に云 座  
 かと見ると云ひかく。空より降降り者 聞かす云 吾樂阿訶といひかけて鏡を持す。淨波瑞鏡  
 衆聞ゆるは佛菩薩未現に尊ぶ所なり。 聞かす云 吾樂阿訶といひかけて鏡を持す。淨波瑞鏡  
 となすはや云 此最後の一節 野守云  
 リ。すはや云 此最後の一節 野守云

五番目

松山鏡

無季

子方 母ノ靈 俱生神

早行  
 越後の國松の山家よほまひき  
 者まほい。さても某久くほほひあれ  
 妻よおくれ。昨日今日と存る人も  
 はや三年よあつてい。又いふれ形見よ  
 娘や一人持ちてい。餘つよ母が事や  
 歎きの程よ。對の屋や造つ傍よ置る



ころ。又今日思ふは母の念。日よし  
 程よ持佛堂より出でて焼香せよと  
 思ひし子カサシ上。雨とあつ。陽臺  
 の時留め難く。花と散つ雪と消え。金  
 谷の春行くもあ。月日の道守  
 ちりれど。母御離れて今年のはや  
 既ハナ三平の其日ハナあコ。無コ。

何事やらし娘が獨言を申す。娘よ  
 あら。父もあつたぞ。持佛堂をわ  
 ち。あ。思議や。何やら物や  
 隠か。母も。娘。母の  
 あ。一時。結。首。や。な  
 ち。い。旅。の。今  
 ち。の。















我が朝の聖武天皇の后。光明皇后  
 おくならせ給ひて後。つひも后の御別  
 を悲み給ひ。梵天よ祈誓志給へた。  
 國王憐み給ひ。玉の輿よのせ奉り。  
 こたびは母は母と戻り給ひ。なごも  
 あつ。なごもなごもて。おの事。りて  
 母の今のおも。なごの事。のあひ

ゆき  
 の  
 事  
 事  
 事

かみなるおの事。も母も娘よ  
 名残を深く惜み。おひ。若くは  
 ちやうの事。もや。ちやうの事。りて  
 鏡を見たり。や。なご。た。なご。なご  
 ちやうの事。もや。ちやうの事。りて  
 母の影の映る事。も。何とて  
 條なき事。も。や。ちやうの事。りて

事  
 事  
 事

子方上  
 怨め



あれ程母のまゝまを思ひ隔て山  
 馬の愚よ見えを給ふと鏡の前よ  
 泣き居たりサヌクげも別れての後も  
 未だ干ぬ袖よ異妻を重ね給ひぬらん  
 其怨もや遠夜の見えと思へぬ  
 ろらぬよ父もそ疎くも地中われ  
 ろ見えよたらちねの親の飼よ替地

の威のざと細一誰をかも窓ひ瘦せ  
 顔ぞ見ても泣く。涙もまの悲やあ  
 底よつ鼻つ眞澄鏡あつと母よ  
 空賢せよと我が影よ指をたまげよ  
 哀あつたてならぬ幼き身のひあれ  
 幼き身のひあれ 早行 語道断の事  
 我が影の鏡よ映ひをみて母が影よて



あらうと申すハ  
いふ

山家と申すハ  
トモ

あつちの由らふも。總して此松の  
山家と申す。無傳世界の處まで。女  
あつちの蓮鐵將水をつけても。色を飾  
ちかちかあつちの鏡なにい申す  
あつちの鏡なにい申す。某一年都  
あつちの鏡なにい申す。あつちの  
母はあつちの鏡なにい申す。

あつちの鏡なにい申す。今たの時娘を列して。  
あつちの鏡なにい申す。此鏡を目よ  
あつちの鏡なにい申す。我が影の映るを見  
母と思ひ歎く事の不徳なる。あつち  
あつちの鏡なにい申す。あつちの鏡なにい申す。  
あつちの鏡なにい申す。あつちの鏡なにい申す。  
あつちの鏡なにい申す。あつちの鏡なにい申す。  
あつちの鏡なにい申す。あつちの鏡なにい申す。



世の影の映ひかたをいひて一見しよ。  
 ぶらさち等しては影を映せる扇  
 の影いさかして思ひ知れ子オカレ上げよ  
 げよの影の如く今もかくも川  
コキ吉野の岸の山吹風吹けど  
子方底ある影も散れが散りコキ靡けバ  
コキ靡く款々の影をあやまら子方

早はあなま地上おなまコキいほぞ  
 母よ似りコキ我コキ影あからあつが  
甲やコキ父コキあわれ地中われコキ  
子親甲似コキあコキ思コキわコキてコキ恋  
コキ時コキ鏡コキをコキぞコキ見コキらコキ往コキ事コキ渺コキ茫コキ  
コキてコキもコキべコキてコキ夢コキよコキ似コキたコキりコキ舊コキ遊コキ零コキ



落して半。白水は帰き。これぞ  
 水ともしもこころをいざ。即ち漢女が  
 粉を添ふる鏡。清然玉たり。花と  
 いさこもまれば。蜀人衣を洗ふ錦。  
 あれさても。汝は汝の故郷よ。さそ帰  
 らば。錦の袴。君がため。昔を語り。  
 申まべし。夢の驚き。絵よあよ。

クセ下

唐土よ陳氏とて。賢女の聞えありけ  
 り。世の習思をまも。夫遠行の子細  
 あり。これや限と思ひけし。形見の鏡破  
 り。猶歩ぞ残る。日月の宵よ待ち  
 明け。恨み交も絶え。至も来も。憂き  
 年月を古里の。軒端の萩の秋更けて。  
 風のたより。のつて。聞けば。夫ハ其國の











地をかつも踏みあら〜大地をかつ  
 踏み破つて奈落の底まで  
 よける

大正十年十二月十五日印刷

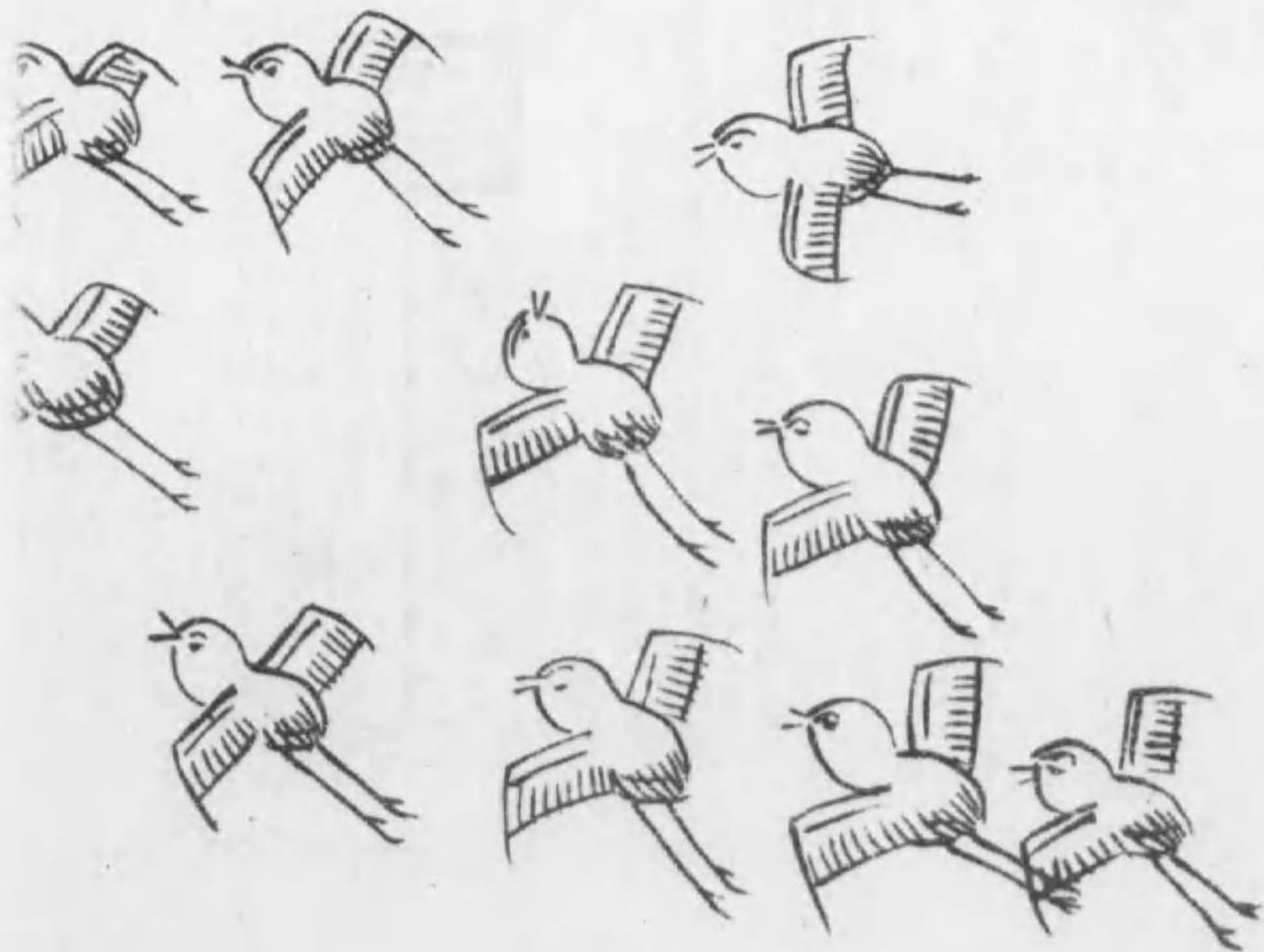
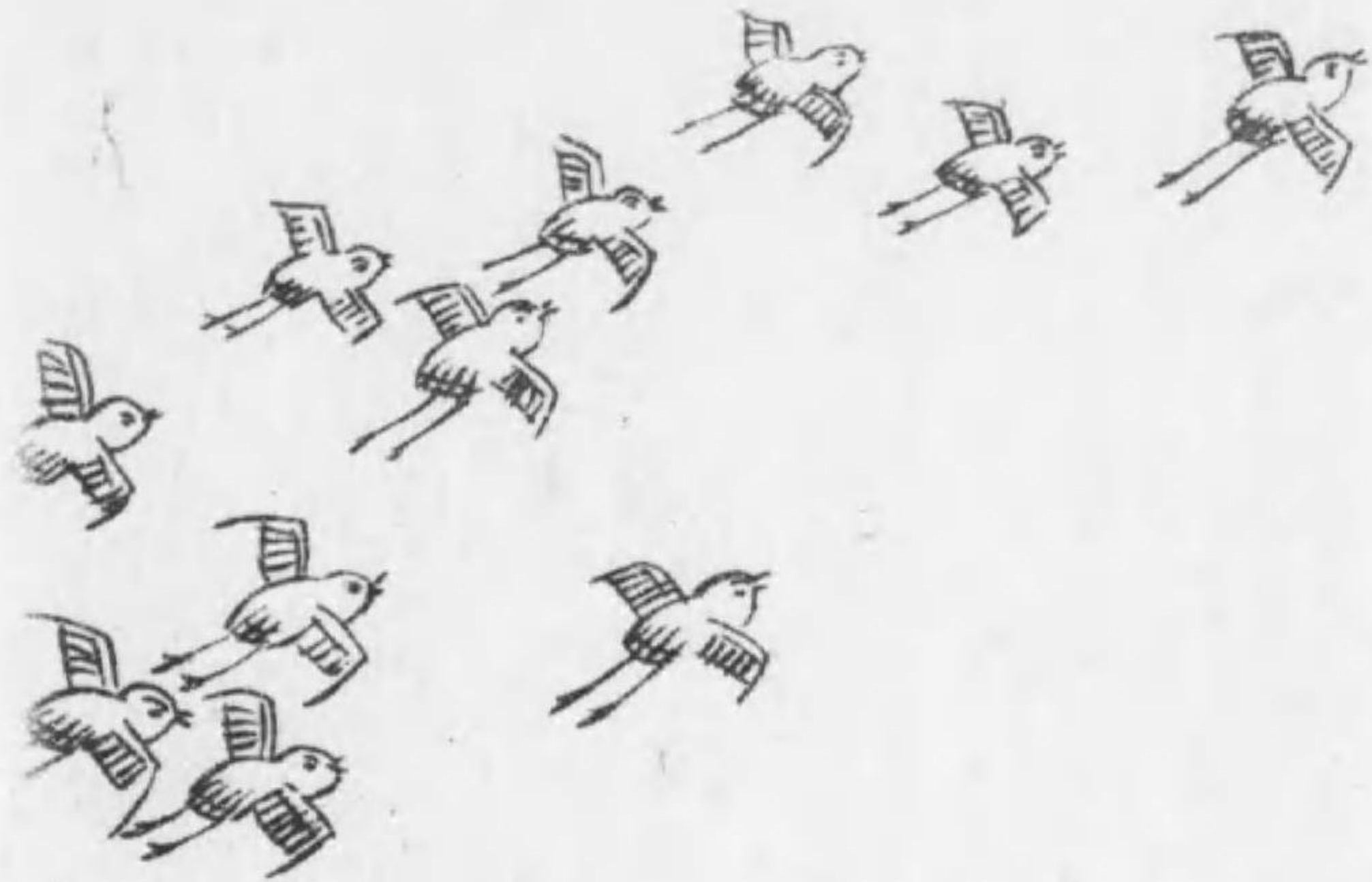
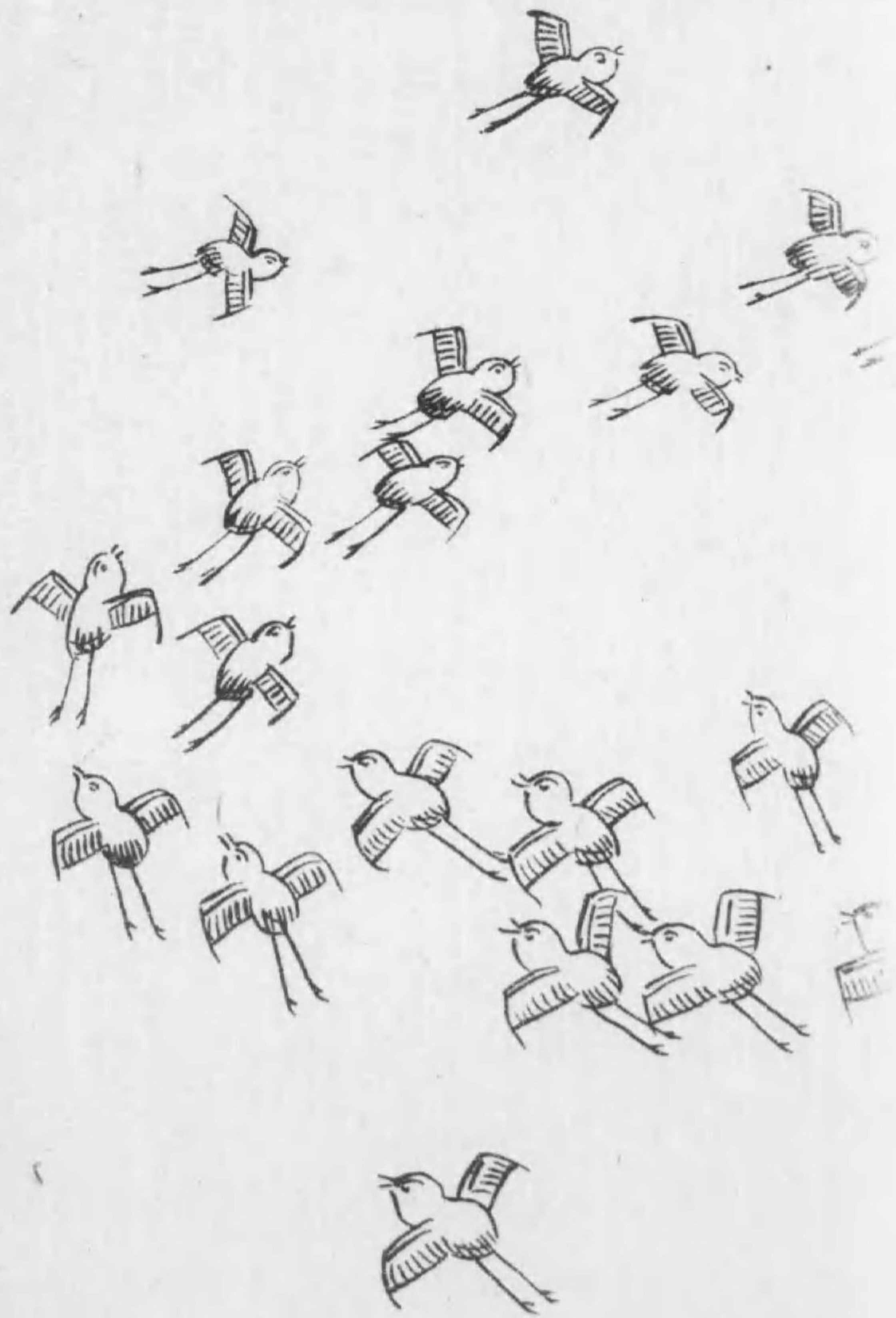
大正十年十二月二十日發行



訂正者 丸 岡 明桂  
 相傳者 丸 岡 明桂  
 發行所 土居源太郎  
 印刷所 鈴木彌作  
 東京市神田區今川小路三丁目九番地  
 東京市神田區東板下町十二番地  
 東京市神田區東松山下町十二番地  
 東京市神田區英堂印刷所  
 發行所 觀世流改訂本刊行會  
 電話九段 二三〇五番  
 振替東京 一三四七五番



6/8  
6/1





終

